

どんな返事が来るだろう インドネシアへ宛てた 年賀状

昨年12月11日、本州最北端の地、青森県にある八戸市立長者中学校では、中学1年生の生徒たちが年賀状を書いていた。自分の得意な絵を描く子、干支や富士山など、正月らしいデザインの手紙を買って用意してきた子。82通りの年賀状が徐々に出来上がっていく様子に、間もなく新しい年を迎えることを実感する。

「これ、誰に出すの」。そう尋ねると、「インドネシアの大学生」と元気のいい声。「日本語を勉強している大学生だから、少し日本語で書いても大丈夫なんです」。

書きかけの年賀状を照れながら見せてくれた生徒たちの中には、辞書を引きつつ、英語のメッセージを添えたり、インターネットでインドネシア語の「明けましておめでとう」を調べて書いていたりする子もいた。彼らが思い思いにしたためた年賀状は、今頃、インドネシアに到着し、同じ八戸出身で、現地で日本語教師として活動するJICA青年海外協力隊の出貝佳子さんを通じて、地元の大學生に手渡されていることだろう。



衣類回収のボランティアで自分の出身幼稚園を訪れた生徒たち。
細山先生が大手衣料品メーカーにCSR活動の講演依頼をしたことが取り組みの始まりだ

圏以外の国のことも知ってほしいという思いから、国際理解につながる授業を始めました」と振り返る。

昨年9月、細山先生が地元のJICA青森デスクから、スリランカ、インドネシア、ルワンダで活動中の青年海外協力隊を紹介してもらったのを機に、彼らと生徒たちとの間でメールのやり取りが始まった。インドネシアで日本語教師として活動する出貝さんから、現地の人々の暮らしぶりを教えてもらったという土屋実穂さんは、「私たちは当たり前のようにトイレトイパーを使っているけれど、外国ではそうではないと分かりました。これか

世界とつながる 教室

「どんな年賀状ができたのかな」と細山先生も興味津々。3学期は世界とのつながりを踏まえつつ、「自分の夢」をテーマに授業を展開する予定だ



年賀状を受け取る
インドネシアの学生たち



世界の友達へ、届け年賀状

元日の朝。いつもならまだ寝たい時間なのに、大切なあの人やこの人から年賀状が届く朝は、待ち遠しさに心が躍る。今年、そんな年賀状の喜びをインドネシアに伝えたのは青森県八戸市立長者中学校の1年生たちだ。



connect with
Indonesia
インドネシア

完成間近の年賀状には、インドネシア語、英語、日本語の3カ国語でメッセージが書かれていた



らは大切に使用したいと思いきすと話した。

生徒と世界をつなげる活動をさらに広げようと、次に細山先生が考えたのが、インドネシアで活動する協力隊の赴任先の生徒たち、つまり日本語を勉強する現地の大學生との交流だ。こうして、青森から海を越えて年賀状を送ろうという計画が始まった。

世界を知ってもらおう それは生徒たちにも 道をつくること

「今、自分たちができる国際協力」は、年間を通じた総合の授業だ。1年生たちは、この授業でこれまででもさまざまな取り組みを行ってきた。

1学期は、「日本を知ろう」から始まり、地元出身の講師を招いて八戸市に伝わる昔話を聞いたり、夏には岩手県の九戸郡野田村で東日本大震災の復興ボランティアとしてお年寄りを訪れたりしながら、自分たちの暮らす地域への関心を高めた。2学期になると、「世界を知ろう」にステップアップし、JICAの協力を得て、シリアで活動していた青年海外協力隊経験者を招いて講演会を開いた。シリアのイスラム教徒の女性たちが身に着けている「ニカブ」をまとい、顔を含む全身を黒の衣装で覆った姿で登場した元協力隊員は、現地の暮らしやイスラム教について話し



シリアで活動していた青年海外協力隊経験者の講演会。「シリアでは2人に1人が避難を余儀なくされている」と聞いて驚く生徒たち

てくれた。

「生徒たちにとっては、初めてイスラム教を身近に感じた体験となりました。いろいろなニュースが飛び交う毎日ですが、講演会のおかげで、生徒たちはイスラム教に対してすんなりと関心を向けたようです」。そう話す細山先生の言葉通り、実際、年賀状作りが熱中する教室では、「イスラム教の人がたくさんいる国では、クリスマスはないって聞きました。インドネシアもそうです」と、色鉛筆片手に磯岡咲杜君が話してくれた。日本と異なる慣習や文化に初めて出会った生徒たちは、

それぞれが講演会などを通して、地域へのイメージを膨らませ、自分なりに理解を深めているようだ。

長者中学校では、このほか、難民をはじめとする世界の人々に衣類を届ける大手衣料品メーカーのCSR（企業の社会的責任）活動に賛同し、昨年10月に1年生全員で衣類回収ボランティアにも挑戦。手作りのポスターと回収箱を持って自分の出身幼稚園や小学校などを回り、地域の人々の協力を呼び掛けた結果、2週間で約4300枚のリユース・リサイクル衣料が集まった。回収した洋服は、メーカーを通じて世界中の人々に届けられている。

「私自身ボランティア経験はありませんが、教師として子どもたちに世界につながる道をつくってあげられたらと思うんです。それに、世界中にたくさん友達ができたら、きっと平和な世界になるんじゃないかなって」。明るく生徒たちを照らす細山先生の周りには、絶えず笑顔の子どもの姿があった。